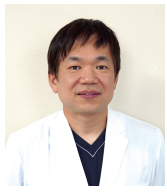
天使病院

子どもの死を多職種検証で予防

北海道から「CDR」モデル事業受託

天使病院（北海道）は、CDR（Child Death Review）のモデル事業の運営を北海道から委託された。CDRとは、子どもが死亡した事案について多職種・多機関が連携して背景や要因を詳しく検証し、予防可能な死を防ぐための具体的な対策を導き出し、行政施策や社会への啓発として還元していく一連の取り組みだ。



「100回検証を行えば100通りの予防策が出てきます」と佐々木科長



北海道から委託を受け、院内横断的な専任チームが発足

CDRは、こども家庭庁が推進する事業で、北海道でも体制整備が進められている。天使病院の佐々木理・小児科科長は、日本小児科学会CDR委員会副委員長や北海道大学客員研究員としても活動しており、以前から道が運営するCDRモデル事業に参画していたが、9月からは同院が道から委託を受け、同事業の運営を担うこととなった。

佐々木科長は「子どもが亡くなった後、その原因を調べ、どうすればその子どもが亡くならないようにできたかという対策を考えます。これに基づき、国や行政が政策をつくり実行していくのが、CDRの一連の流れになります」と説明。対象は原則18歳未満のすべての子どもであり、過去の悲劇を教訓に変え、未来の子どもの命を守る仕組みとして位置付けられている。

北海道でのCDRモデル事業は道庁が主導し、北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学の道内3大学や医師会とともに立ち上げられ、佐々木科長も初期から携わってきた。

しかし、行政が多忙な業務を抱えながら検証を迅速に回すことには制約がともなうことから、「スムーズに進めるには、医療機関に事務局機能を置き、チームで動かす仕組みが必要でした。全国のモデル事業でも、多くが大学病院や小児科医会に委託していますが、道内では当院が手を挙げて受託する流れとなりました」（佐々木科長）。

委託を受けた同院では、多職種で専任チームを立ち上げた。担う業務は検証会議の開催と運営、関係機関からの情報収集や対外的な連絡調整、集まった機微な情報を安全に一元管理するためのデータベース化など。佐々木科長は「初めての体制構築ということもあり、手探りの部分や足りないものを補いながらではありますが、院内の多職種が、それぞれの役割を果たしながら進めています」と明かす。

多職種が対等に意見を交わす

実際の検証は段階を踏んで実施する。第一段階が対象症例を絞り込む「選定検証」だ。道内の18歳未満の子どもの年間死亡数は約150人。全国では年間約6,000人の子どもが亡くなっている。この全数に対して大規模な会議を行うのは、人的・時間的負担から現実的ではない。そのため選定検証を通じて、多職種による「個別検証」が必要な事案と、専門の医療機関で深掘りする「専門検証」の事案に振り分ける。

たとえば、白血病などの難治性疾患で入院治療の末に亡くなった事案は、警察や消防が議論に加わる必要性が乏しく、小児血液腫瘍の専門医が集まる「専門検証」の場で検討するほうが実効的な知見が得られる。一方、外因死や突然死、家庭環境が複雑な事例などは、関係機関が幅広く集まる「個別検証」が必要だ。

個別検証には、担当医師だけでなく、地域の保健師、搬送した消防の救急隊員、法医学者、警察関係者、児童相談所の担当者、弁護士など多職種が参集。現場の状況や成育歴、支援経過をもち寄り、死因の究明とともに防ぐ手立てを突き詰める。個別検証を経た事例では、道全体として取り組むべき予防策を導き出し、道庁の推進会議やワーキンググループと連携し、年度末に提言書として取りまとめる。

佐々木科長が一連の検証会議で最も心がけているのは、多職種が対等に意見を交わせる環境づくりだ。「多職種によるカンファレンスでは医師主導になり、ほかの職種が発言しにくくなるパターンが多くなります。医師だけが、話し続ける状況を避け、参加者が専門的な見地から安心して意見を出せる空気づくりを心がけています」と強調。

さらに「私の持論として、100回検証を行えば100通りの予防策が出てくると考えています。医師だけなら医学的な予防策にとどまりますが、救急隊が入れば、現場でのCPR（心肺蘇生法）の普及や通報体制の課題が見えますし、保健所や保健師が入れば、乳幼児突然死症候群の予防や遺族へのグリーフケアのあり方が浮かび上がります。多様な視点が交差することで、提言に深みが生まれると考えます」と力を込める。

一方、事業が直面する最大の壁が「個人情報保護」と「遺族の承諾」。現在、CDRには単独の法律が存在せず、医療機関や行政、警察が保有する死亡関連情報を共有するための法的根拠が不十分だ。佐々木科長は「自死や事故などの外因死では、最も詳細な情報をもつ警察からの情報提供が得られにくい。また、現行の枠組みでは、ご遺族からの承諾書の取得を前提としている自治体が多いが、深い悲嘆にある保護者に承諾書を求めること自体が酷であり、取得が困難なケースが多い。父親が同意しても母親が拒否する場合など、現場の混乱も大きいという課題があります」と指摘する。

この解決策として、「要保護児童対策地域協議会（要対協）」を挙げる。要対協では、虐待の恐れがある子どもの支援に関し、関係機関が守秘義務を負ったうえで、保護者の同意なく情報共有することを認めている。

佐々木科長は「子どもの命を守る公益性の高い事業である以上、個人を特定する情報を除いたうえで、ご遺族の承諾を必須とせず関係機関が情報をもち寄れる法整備が必要です。個人情報保護法にも社会的な公益性のための例外規定があり、現行法の枠内でも柔軟な運用が求められます」と訴える。

今後の展望について、「第一の目的は、防げるはずだった子どもの死をゼロに近づけ、子どもたちが安心・安全に生活できる社会をつくること。子どもを救うには医療機関だけでは不可能ですので、医療、福祉、教育、警察、消防、地域などが連携し、セーフティネットを築かなければなりません。当院が受託したモデル事業を通じて検証の実績を積み上げ、多機関が機能する連携の土台をつくっていきたいです」と意欲的だ。

山形県徳友会

総会・講演会・交流会開催 70人が参集し親睦を深める



引き続き連携を重視する方針を強調する菅原会長（中央）

山形県内にある徳洲会病院・施設の協力企業で構成する山形県徳友会は9月24日、山形市内で2026年度総会・講演会・交流会を開催した。会員企業や徳洲会病院・施設から約70人が参集し盛会となった。

総会では遠藤幸治・山形徳友会事務局長が司会を務め、菅原正信同会長が冒頭に挨拶。今夏発生した令和8年熊本地震や各地の水害に言及し、「一日も早い復興を願っています」と被災地に思いをはせた。引き続き病院・施設や地域と緊密に連携を取り、会員相互の親睦を深めながら活動していく方針を強調した。議事では25年度事業報告、同決算・監査報告、26年度事業計画案、同収支予算案の各議案を承認した。

続く講演会では、山形徳洲会病院の二井一則・耳鼻咽喉科部長が登壇。同院での診療内容の紹介に続き、学生時代に競技スキー部に所属していた経験を生かし、2020年から取り組む「蔵王スキーパトロール隊」のレスキュー活動などを紹介した。

この後の交流会では、菅原会長や笹川五十次・山形病院院長などの挨拶に続き、10月に異動の寺田康・庄内余目病院院長（現・大和徳洲会病院名誉院長）、片岡隆行・山形病院事務長（現・東京西徳洲会病院事務部長）に記念品を贈呈。新会員紹介後に、髙橋勝治副会長の音頭で乾杯を行い、会員や病院職員が交流を図った。

名古屋病院が心臓血管外科術後の会

74人が参加し交流を深める



患者さんやその家族、病院スタッフら計74人が交流

名古屋徳洲会総合病院は10月3日、第27回心臓血管外科術後の会を開催した。術後の患者さんやその家族が情報交流するのが目的で、病院スタッフと合わせ計74人が参加。会場となるホテルに到着後、岡田拓己・管理栄養士が「動脈硬化と心臓血管病予防のための食生活のポイント」、大橋壯樹総長（医療法人徳洲会副理事長）が「術後に気を付けること」をテーマにそれぞれ講演を行い、参加者は熱心に耳を傾けていた。

その後は温泉入浴やアロマハンドマッサージで心身を癒やし、昼食ではマジックショーや恒例の抽選会で大いに盛り上がった。

参加者からは「回復した方々と体験談を共有でき、術後生活の支えになります」、「徳洲会と患者とのつながりを感じることのできる素晴らしい会だと思います」。スタッフからは「ICU（集中治療室）で看護していた患者さんと、退院後にこうして交流できるのは不思議な感覚です」、「リハビリテーションを担当した患者さんが、一緒に旅行できるまでに回復したことがうれしいです」など感想が聞かれた。



大橋総長（左から4人目）をはじめ医療従事者がアドバイス

No.1

岡と川上が世界選手権で金などメダル

徳洲会体操クラブの存在感増す！



メダルを掲げる岡（右）と川上

第54回世界体操競技選手権大会が10月17日から9日間、オランダで開かれ、徳洲会体操クラブの岡慎之助と川上翔平が日本代表として出場した。男子団体総合の決勝では、岡が3種目、川上が5種目で演技。岡はつり輪、川上は跳馬と平行棒で14点台をマークするなど日本の連覇に貢献した。とくに川上は今回が初代表ながら、予選を含め出場した種目すべてで日本の1番手を務め、チームに良い流れをもたらした。

「代表での初試合は震えるほど緊張するので、自信をもって演技してくれた翔平には感謝しかありません」と岡。

男子個人種目別では、鉄棒の決勝で岡が14.800をたたき出し、銀メダルを獲得。世界選手権の個人戦では初めて表彰台に上った。帰国後、岡は「やっぱり団体の結果が一番うれしい。個人総合でも金メダルを取りたかったけどミスが出て、自分の弱さも感じた大会でした」と吐露。それでも大会最終日の種目別を「個人総合でのミスを修正して演技できました」と振り返り、「良い一歩になりました」と前を向いた。

川上も一番の喜びを「団体金メダル」と強調。「歴代代表の方が団体での金メダルにこだわる理由が、あらためてわかりました。団体で勝つことが世界一の証明になる」と話し、勝ち続ける意欲を見せた。

所属チームの仲間でもある岡とは、同い年のライバルとして小学生の頃から切磋琢磨。川上は「一緒に金メダルをとれたのは本当に良い経験。徳洲会のふたりがトップ（代表）にいることは自信にもつながる」と話し、「来年の世界選手権でもメダルを取り、2028年開催予定のロサンゼルス五輪に向かいたいです」と意気込む。